書写

新しい書写教科書

手で書くことの価値を実感し学びとするために

←左の二次元コードより、『新編 新しい書写』の特長をご覧いただけます。

東京書籍
上越教育大学 教授
新編 新しい書写 編集代表
押木 秀樹（おしき ひでき）

手書きの価値とその学び

情報機器の普及により、社会生活において手書きする機会が減り、教室においてもタブレットPCなどの普及によって、生徒が板書を書き写す機会が減っているのではと言われている。数千年にわたる文字使用の歴史から見ても、大きな変化に直面していると言えるだろう。変化する文字環境の中で、手で書くことの価値とその学びの意味を踏まえた、書写の学習が求められる。

現在、手で書くことが求められるのは、どのような場面だろうか。この問いに対し、次のような答えや感想が返ってくることが多い。

- メモやノートを取るとき
- 思いついたアイディアや思考過程を書くとき
- 少し改まった手紙を書くとき
- サインをするとき
- 毛筆で書くことは大切にすべき

また、手書きの手紙などに触れると、温かみや人の行為の大切さを感じるといった声も聞かれる。確かにAIに「手書き風」は作れても、「手書き」はできない。

現代の文字使用に即した学習や、伝えていくべき文字文化を意識した学習でありたい。さらに、生徒が生涯にわたって文字を使い続けていくにあたり、時代に即した文字の使用のために基礎となる力を身に付けてあげたい。場面に応じ、どのように書くべきなのかを主体的に思考できる力といえよう。そのために、中学校における国語科書写は、教科書の巻頭見開き（図1）において、文字を「書く」ことについて考えることから始まるのである。

図1 『新編 新しい書写』巻頭見開き 文字を「書く」って、なんだろう（一部）

思考の速度と読みやすさ

あるテレビドラマで、主人公が数式をすごい勢いで書きながら謎を解くシーンがあった。数式に限らず、頭に浮かんでくるアイディアや概念を、そのまま書き表すといった場面には手書きが適している。ただ、書きたい内容が頭に浮かぶ速度が速すぎて、手が追いつかないために、自身で読み返したときや、他の人が見た際に、読めないようでは困る。読めないという程でなくても、読みにくい字ではせっかくのアイディアや記録も生かしにくい。この悩みは文字の歴史とともにあったと推測できる。およそ西暦200年頃から300年にかけ、中国における簡牘（かんとく）（竹簡など）等において、速書きのために歪んだような、左に傾いたような字形が見られる。それが350年頃、書聖として知られた王羲之（おうぎし）の字では、速く書くのに適した行書の完成形として、読みやすく整った字形を見ることができる。

この特徴を学ぶことが、最初に述べた「メモやノートを取るとき」「思いついたアイディアや思考過程を書くとき」といった場面で機能する。過去の人々は、師の書く姿を見て、時間をかけて「習う」ことで身に付けた。これを、現代の国語科書写はどのように実現しようとしているか。時間をかけた動作の学習に代わるものが、筆順のパターン分析の成果を生かした「動きのパターン」の学習である（図2）。

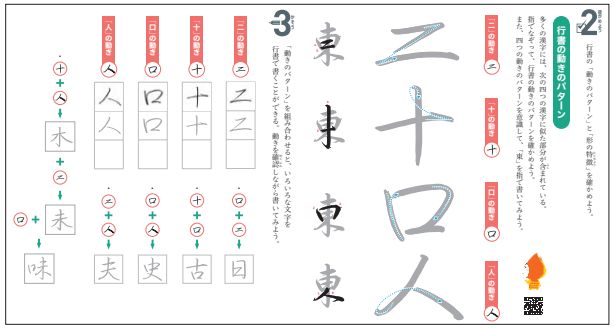

図2 同 pp.26-27 読みやすく速く書くための動き（一部）

図に示すように、基礎となる「二 十 口 人（ハ）」というパターンを用いて良い動作を学び、それを組み合わせることで、多くの字を良い動作で書けるように工夫したものである。図では「日 古 史 夫 未 味」を例に、その応用が示されている。

もちろん、そのパターンをどのような動作で書けば良いかがわからなければならない。そのために、動画教材を準備し、それを参照するための二次元コードを教科書に配したことで、タブレットPCなどで動画として見ることができるようになった。

読みやすい文字と自分らしさのために

では、読みやすい文字のための学びはどうあるべきか。字形を整えて読みやすくするための理論、原理・原則としての「書写のかぎ」を学習し、それをどの字に生かすかといった学習活動が推奨されている。原理・原則の理解とその応用は、生徒自身の文字を大切にすることでもある。手本をまねるだけの学習は、ある意味、一人一人の文字における個性のうち、悪い点ばかりでなく良い点まで失わせる可能性があるからである。

一方、毛筆の文字（図3）をみて、こんなふうに書きたいという思いをいだくことも、否定すべきではない。どのような原理・原則を用いれば良いかという思考の過程と、書きたいと思う文字例の提示の両方が重要だと考える。

効果的に書くことと文字文化

平成29年学習指導要領の解説では、文字文化に、文字そのものの文化と、文字を書くことについての文化とがあるとしている。文字そのものの文化としては、漢字の成り立ちの学習などがイメージしやすい。では、文字を書くことについての文化については、どうだろうか。例えば『新編 新しい書写』では、空海が最澄に宛てた手紙である「風信帖（ふうしんじょう）」が示されている。同じ空海の行書で「灌頂歴名（かんじょうれきめい）」という名跡があるが、こちらは手控えとしての草卒（そうそつ）な書きぶりでありながら、さすがと思われるのに対し、最澄にあてた「風信帖」の方はかしこまった緊張感を伴った美を感じさせる。文字文化の学びは、時代を超え、誰のために何のために書くのかを意識し、それにふさわしい書きぶりであろうとするところにつながっていく。さらに手書きだけではなく、顔真卿（がんしんけい）の手書き文字の特徴と明朝体との比較、そしてUDフォントの特徴といった多様な文字の文化に広がっていく（図4）。

このような幅広い学びの中から、生涯にわたって主体的に文字と関わっていける資質・能力を育てる書写でありたい。

図3 同 p.51 行書と仮名の調和（一部）

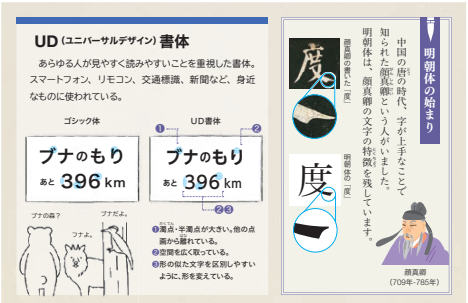

図4 同 p.17 手書き文字と活字（一部）